ビームス支援で新商品

ファッション性も重視 駒ケ根の4事業者が開発

大手セレクトショップのビームス（東京）が展開するブランド「BEAMS JAPAN（ビームス ジャパン）」と駒ケ根市が連携し、商品開発の支援を受けてきた地元事業者の発表会が5日、市内で開かれた。同ブランドのバイヤーらの助言を受けた4事業者が新商品計10点を紹介しながら、開発過程や気付いたことを振り返った。

参加したのは金属加工などの「ヨウホク」、伊那紬（つむぎ）を製造する「久保田織染工業」、めっき加工の「塚田理研工業」、オフィス家具製造などの「トヨセット」。5月から、サイズや色選び、個性の表現方法など、消費者に選ばれるための助言を受けてきた。

ヨウホクは自社のアウトドアブランド「リベル」の新商品3点を発表。火花を飛ばして火おこしをするファイヤースターターは、既存製品を小型化しつつ色のバリエーションを増やした。実用性に加え、ファッション性も重視し、担当者は「ラインアップに幅ができた」と喜んだ。

他の事業者からは、開発期間の短さから「スピード感についていくのに必死だった」などの苦労話もこぼれた。だが、知名度の高いビームスとの連携が「社員のモチベーションになった」など前向きな意見が多かった。

商品は各社で販売し、市のふるさと納税の返礼品にも加える。11月21日～12月18日は、ビームス公式オンラインショップでも販売する予定。市は商品の反響を見つつ、連携事業の継続を検討する。

市田柿 今年は大玉

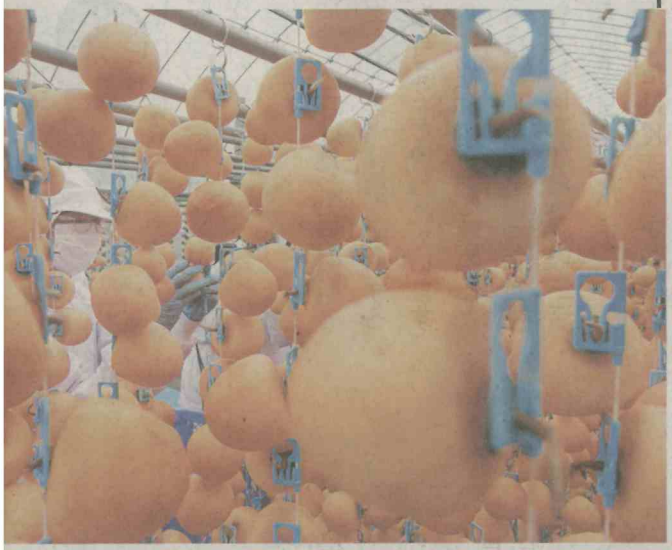
飯伊地域の特産 生産最盛期

飯田下伊那地域特産の干し柿「市田柿」作りが最盛期を迎えている。飯田市上郷飯沼の柿農家松沢正芳さん(65)宅では10日ほど前から、同市座光寺の加工場で作業が進む。今年は9月以降の雨や高温で大玉傾向といい、乾燥に時間がかかるため、店頭販売は例年より5日ほど遅く12月上旬を見込んでいる。

松沢さん宅では5日も10人弱で作業。機械で皮をいた後、乾燥に時間がかかる分、品質管理が難しい。一口で甘さを実感できる干し柿を作りたい」と意気込む。

みなみ信州農協（飯田市）によると、今年は昨年同様の約1100トンを出荷予定で、糖度も平年並みという。同農協営農部係長の米山直樹さん(39)は「温暖化で色づき前に実が軟化する

も加工し、今年は計13トンほどを出荷する。松沢さんは「大玉は



色鮮やかに干し場に並ぶ「柿すだれ」

「応援の会」
小池さん（中

野沢温泉スキ
＝2023年4月
連盟／堀切功

活動資

取り 地域の子どもや市民に
諦めない気持ちの大切さを伝
えたい」と力を込めた。
活動資金はCFサイト「キ
ャンプファイヤー」で12月25
日まで募っている。

中生徒、秀畝の魅力紹介

出身日本画家 チラシを制作

互いに見せ
生徒たち

がんゲノム

患者への

諏訪赤十字